

子どもの領分

国吉 栄

子どもの頃、「子どもの領分」というピアノの練習曲を弾いたことがあります。なまけ者のせい
で、ピアノは全くものにならなかつたのですが、その曲名と、楽しい響きを覚えていいます。おそら
く、子ども向けにやさしく編曲されたものでしょう。子どもの笑う声がコロコロと聞こえる、そんな
曲だったような気がしますが、記憶違いでしょうか。

もうつい分前になりますが、保育の勉強を始めたばかりの頃、子どもの空間表現に関して、
とても印象に残る場面に出会つたことがありました。空間表現とはこなれない言葉ですが、子どもの
「領分作り」と言い換えてもよいかもしれません。ある幼稚園で保育觀察をさせていただいた時
のことです。

ある日、一人の男の子が友だちと一緒に紙飛行機を作っていました。特別に良く飛ぶようと工夫をこらし、時間をかけて作ったものでしたが、すばり台の上から飛ばしたところ、彼の飛行機は、遠くまで飛んで、植え込みの中に落ちました。急いで拾いに行つたのですが、一足先に他のクラスの男児に拾われた後でした。彼はすぐに気がついて、その子の後についていきましたが、結局、何も言わずに引き返し、一人で部屋に入ってしまいました。上書きにはき換える前に、下を向いて黙って涙を拭いています。部屋に入ると、ブロックで小さな飛行機を作り、そつとヒーターの下に隠しました。私は、彼が傷ついた心を、ヒーターの下の暗い密やかな所にそつと隠したこととに心を打たれました。そこでは、誰にも侵入されず、傷つけられず、安全に自分を保つことができるのです。

ところが三学期のことです。その子どものクラスでは、画用紙に色を塗つて立体的に作る電車作りが流行っていました。彼もその一人でしたが、その日は、作るだけでなく、つなげることに、しだいに熱中しだしたようでした。何台も何台も、机に戻つては電車を作り、つなげ、また作る、というようにして、椅子をよけ、机の下をくぐつて、ついに保育室一杯に広げて電車をつなげてしましました。いつも遠慮がちな彼が、こんなにも意欲的に、生き生きと自信に満ちて動いている姿を、本当にまぶしく、そして、うれしく感じました。そう感じたのは私だけではなく、そのクラスの先生も同じだったように思います。何しろ、彼は何枚も何枚も新しい画用紙を使い、しかも途中からは、クレヨンを塗るのももどかしく、とにかく電車の型に折りさえすれば、という状態だったのでから、大人なら誰でも、「もう少していいに作つたら?」とか、「もう沢山作つたから、今日はおしまいね」とか言いたいところだったのです。しかも誰はばからず、保育室中に広げてしまつて。私は、この日の

彼のこの作業が、彼にとつて重要なことであると感じていられたからこそ先生はそれを黙つて見ておられたに違いないと思いました。本当に彼の生き生きとした様は、保育室中を巡る電車の円環の大きさに、よく似あつていました。

ヒーターの下の暗い空間と、保育室中に広がる空間。私は、子どもが、自分の思いや姿を、自分が生きている空間の中に、それを「所有する」という形で、具体的に表現することを、彼によつて教えられました。彼の「領分」は、ついには広々と、しかも他の子どもたちとの共有の場に広げられていました。

昨年、私は子どもの「領分作り」について、ずい分考えさせられました。昨年の秋以降、私の園では子どもたちが椅子や机などで囲いを作つて遊ぶことが目立つて多かつたからです。しかも、それがとても排他的に見えたり、高圧的に見えたり、空虚に見えたりする面が強かつただけに、とても気になつたわけです。「領分」とは、辞書によれば、①所有地の内、領地内、②勢力の及ぶ範囲、また、自由にできる範囲、ということですが、子どもたちは文字通り、自分たちの領分作りをしていたのでしょうか。

狭い片すみに机を横に倒して、あたかも玉よけ盾のように並べ、さらにその外側を椅子で取り囲んで、堅牢な「要塞」を作つた子どもがいました。その囲いの中に机を一つ、椅子を二つ置いて、友だちと二人で絵を描いていました。「みんなは入っちゃダメ。先生はいいよ」。その中で二人は全く同じ絵を描き、私も同じ絵を描かされました。その中は、すべての要塞がそうであるように、内輪の、親

密な者同士が肩寄せ合う場であると同時に、常に外部からの侵入者を恐れ、身構える、緊張感が満ちていました。

別のところには、椅子を沢山集めてきて並べ、他の子どもと争つてまで集めてきたお皿やお鍋やブロッサムやボールなど、山のように家財道具を蓄えただけで、それらで遊ぶでもなく、広い囲いの中でつまらなさそうに腰をおろしている子どもがいました。囲いの中を、豊かに物で満たそうと苦闘したのに、豊かになれないのです。

また、部屋の側面を利用して椅子を大きな半円に並べ、その中でフラワーフープをしたり、ただただ余っている椅子や机を総動員して、とにかく広く囲もうとしたり、時によつては保育中の机や椅子が、囲いとして並べられるためだけに使われたこともありました。昨年の秋からは冬にかけて、このような光景が連日繰り返されていました。

子どもは自分の領分に非常に敏感です。敏感という以上かもしません。私の園は四年前に保育の方法が変わりました。それまでは座る椅子や机が決まっていたのに急に自由になつた時、子どもたちは、うれしさより不安の方が大きいようでした。いつまでも裏に自分の名前が書かれた椅子に執着していました。棒にしばられないで行動するには勇気が必要です。そこにいれば自分の場所は安泰だつたのに、へたをすると自分の居場所がなくなつてしまふかもしれないという危機感があつたのでしょう。不安が強ければ強いほど、古いものにしがみつくようでした。赤ちゃんは、自分のために確保された母親の腕の中に身を置いて、未知の世界を開拓していきます。たとえそこで混乱しても、母親の腕という安全な囲いの中で、安定を取り戻すことができます。囲いを出た幼児は、自分らしく生きら

れる空間を確保するために、不安であればあるほど奔走せざるを得ないのでしょう。何かで囲いを作ることは、そのための実に具体的な努力だと思います。

けれども、子どもたちにとって、囲いを作ること自体が目的でないのは明らかです。同じ頃、やはりよく見られたのが、丈の高いつい立てで仕切った独立した空間を作ることでした。このつい立ては大人の背よりも高く、重い木製で、大人が使うために部屋の隅に置いてあるのですが、いつからか、子どもたちが遊びに使うようになつたものです。このつい立てで仕切られた空間は大変に独立性が高く、見られることを拒否します。おまけに、「はいらないこと」などと書いた貼り紙もしてあります。つい立てのすきまから目だけ出して、「なあに」と言われると、子どもならずともたじろいでしまいます。一昨年のことですが、この閉ざされたつい立ての壁に、「どうぞあそびにきてください」と書かれた紙が貼つてありました。すきまからのぞくと、中には女兒が一人、本を読んでいました。自分をうまく相手に伝えることが苦手で、友だちとどうも長く遊べないばかりか、あからさまに友だちを拒否したりする子どもでした。工作が得意で、入園当初は手を入れると上から刃が落ちてくるギロチンとか、大きな歯のついた魚とか、噛むものばかり作っていました。その子が、扉に「どうぞ、あそびにきてください」と貼り紙をして、中でじっと待っているのです。絵本の『泣いた赤鬼』が、村人と友だちになりたくて、「心のやさしい赤鬼です。お茶もわかしてございます。おいしいお菓子もござります。」と書いた立て札を立てたことを思い出させ、胸を打たれました。ピタリ閉ざされた重い扉には、どうぞ誰か入ってきてくださいという、熱烈な思いがこめられていました。厳重に閉ざされた椅子の囲いの外側から、「こんにちは、入口はどちらですか?」と呼びかける

と、ハッと気がついて、たちまち椅子を一つ動かし、「こちらからお入りください」と招き入れてくれるのには、よく経験することです。目に見える垣根には、かえって人の出入りを秩序立てる入口がつけやすいのかもしれません。「入口はどちらですか?」という呼びかけに、子どもたちが一様に、ホツとしたような、うれしそうな表情を見せるのは、自ら閉ざしてしまった空間から自分の意志で、自分を人に明け渡さずに自由に出ていくことも、帰ってくることもできることに気がつくからではないかと思います。揺れる自我を守るためにには囮いを作ることも必要でしょう。人間は無限の不安には耐えられないからです。けれども一度囮いを作ると、自分の力でそこから出ることはとてもむずかしい。子どもたちの遊びはそのことをよく表しています。

「子どもの領分」は、弱い自我を守り、また拡大しようとする精神の働きの所産です。ただただ堅固な砦で囮まれただけの閉塞状態の領分ではなく、拡張だけが目的の空虚な領分でもない、他との自由な交流ができる実り豊かな領分であってほしい。

子どもの遊びは、一見道は遠くとも、やはりそれを目指しているのだと思います。子どもたちを囮いを作ることに駆り立てている現実を痛みつつ、何とかそこから出る道を見つけ出してほしいと願います。

(立教女子学院短期大学附属愛児研究所天使園)

